

私の研究は、今ちょうど、一つの転機にさしかかっている。一〇年前、留学先の西ベルリンで着手した、一九世紀前半のベルリンにおける都市民衆についての研究を一冊にまとめる（『ベルリン 王都の近代』ミネルヴァ書房）とともに、次の一步を踏み出す準備作業にとりかかっているのである。そこでこの機会に私自身のための覚書として、これまでの研究の狙いと、これから目指そうとしている方向について、思いつくままに書きしるしておきたいと思う。

一九世紀前半のドイツは、さまざまなレヴェルで社会的流動化（人口移動、社会階層移動、職業移動）が進行し、前工業化時代（伝統社会の経済・政治・社会の枠組みが機能不全に陥りながら、これにかわる新たな枠組みがいまだ確立されていない過渡期としての初期工業化の時代であった。私のこれまでの実証研究の課題は、この時代の社会の動揺が最も鮮明に現れるプロイセン・ドイツの政治的中心都市ベルリンに焦点をあて、一八四八年革命に至る初期工業

化時代のドイツ社会の実態を、社会史の観点（社会階層構造、民衆生活、心性、ローカルなレヴェルでの権力関係、社会的抗議運動など）から解明することにより、革命後に本格化するドイツの近代社会形成過程の分析のための手がかりを探ることにあった。

こうした課題設定の背後には、工業化の歴史を各別に、封建制から資本制への移行、産業革命にともなう新たな生産、階級関係の形成の歴史として、あるいは長期的な経済成長過程として扱ってきたこれまでの経済史研究のパラダイムを再検討しようという狙いがあった。これら従来の一国的、発展段階論的な、あるいは漸進的かつ連続的発展といった工業化史像を相対化する道とし

工業化過程の社会史的研究

川 越 修

では、現在の歴史研究の流れのなかではさしあたり、欧米の工業化過程を、アメリカ、ラテンアメリカ、アジアをふくめた世界経済システムの形成史のなかに埋めこむ方向と、工業化の歴史を、国民国家という政治的空間区分（国境）を離れ、生活空間としての地域社会とそこに暮らす人間の歴史として捉えなおす方向が考えられる。上述の拙著は、この後者の意味での社会史研究への私なりのアクセスを採った試行錯誤の産物である。

私のこれまでの研究からは、今後、対象とする時期をドイツにおいて工業化が本格的に進行する一九世紀後半に移動させつつ、引き続き研究課題とすべきいくつかの具体的な問題が浮かびあがってきた。すなわち、手工業、都市化、家族をめぐる問題である。これらはいずれも「後発」工業国ドイツの事例にもとづき、固定化された工業化の「先進国モデル」を相対化するための素材となりうるテーマである。

まず手工業についてみよう。手工業↓問屋制家内工業↓マニファクチャー↓工場

制という発展図式をもとに組み立てられてきた従来の経済史像からすると、手工業は工業化とともに「没落」すべき運命にある。手工業の解体ないし「分解」度が、工業化の成熟度をはかる一つの指標とされ、工業化時代のドイツにおける手工業の残存は、工業化の遅れにともなうドイツ社会の特殊性の例証とされてきたのである。しかしこうした理解は、問題発見のための作業仮説としての図式を、歴史的現実と取り違える倒錯から生じたものであって、この図式をもとに見ざるべき現実とは、種々の生産形態の混在状態であり、解明するべきは、一見カオスにみえる現実を構成する諸ファクターの constellation（相互位置関係の見取り図）である。すなわち私にとっては、手工業史研究の課題は、ドイツ社会における工業化と手工業の相互関係を、手工業的な在来技術と移入新技術の関連、職業ないし技術教育にはたした手工業の役割といった具体的問題に即して検討しつつ、比較工業化社会論の新たな作業仮説を構築することにある。

これとはほぼ同じことは、都市化や家族をめぐむ問題についても指摘しうる。欧米のいわゆる先進工業国の歴史的経験を、いわば勝因解說的立場から理念化することによって組み立てられた近代化論では往々、これらの問題は都市への人口集中度、近代的不インフラストラクチャーの整備度、核家族化の進行度といった、直線的発展としてイメージされた近代化過程の指標づくりの一貫として取り扱われてきた。しかし手工業問題と同様、これらの問題も、近代化の単なる従属変数としてではなく、近代社会の形成期を生きた人々のそれぞれの問題をめぐる試行錯誤的な行動の軌跡として、ひとまず内在的に検討されねばならない。そしてそこでは、近代社会は、こうした個々の軌跡の絡み合った束として捉えられることになる。私自身は当面、都市化については上下水道の整備とこれに対する住民の対応、家族については様々なヴァリエーションをもつ家計行動といった具体的な問題を手がかりに、一九世紀後半のドイツにおける近代社会の形成・展開メカニズムを、いわば

「下から」あぶりだす作業を進めたいと考えている。

主として今後の研究テーマについて、まともりのないメモを書きつらねてきたが、一言でいうならば、概念操作による歴史的現実の整除と、紆余曲折にとんだ歴史的現実の細部への沈潜という両極の間で、歴史研究の占めるべき位置を明確化する作業が、私にとつての「現在と過去との対話」の課題である。

（大学経済学部助教授）

William Morris (1834—1896) は、詩人として、美術工芸家として、社会主義者として、またユートピア小説 *News from Nowhere* の作者として知られているが、この十九世紀イギリスの生んだ多才な巨人が明治時代の社会主義者達に与えた影響は決して小さいものではなかった。明治二〇年代後半の『早稲田文学』『国民之友』を中心とするモリス紹介、三〇年代を代表する村井知至の『社会主義』、堺利彦による週刊『平民新聞』紙上のモリス紹介及び *News from Nowhere* の抄訳、これら一連の社会主義者としてのモリス紹介は、イギリス社会主義運動における指導的立場にあったモリスの名を日本に知らしめるのに大きな力があった。特に、村井の『社会主義』におけるモリス紹介はわが国最初のまとまったものとして特筆に値する。

村井知至(1861—1944)が『社会主義』を出版したのは明治三二年のことであった。村井は安部磯雄、岸本能武太等と共に、明治十二年同志社英学校に入学し、後に新島の学んだアンドルーヴァン神学校及びアイオワ

大学に学んだ。明治三〇年、わが国最初の「社会問題研究会」が発足し、翌年「社会主義研究会」(同三二年「社会主義協会」と改称)がユニテリアン教会において結成された。そのメンバーの多くは同志社の出身者であったが、

モリスと村井知至

山田 眞 實

帰国後の村井はその初代会長となった。村井は安部と並んで当時の代表的な社会主義理論家として活躍し、其著『社会主義』は明治の社会主義草創期における代表的な文献として高く評価されている。村井は『社会

主義』において私有資本の廃止や資本の国有化を主張し、また労働に関しては競争よりも協働を説いた。「非個人主義」と「公共精神」を標榜する村井の社会主義はたぶんにユートピア社会主義に近いものである

が、「公平なる富の分配を行って社会全体の福祉を計画せんとする社会改良策」でもあった。このような彼の社会主義観は、明治期のキリスト教的社會主義を代表するものといえよう。

村井の『社会主義』には、松村介石、横井時雄、和田垣謙三の三名が序文を寄せ、その出版意義の大なることを称讃しているが、村井自身も二度に亘る渡米の結果「ますます社会主義の妙理に服し之を邦人に伝へんと欲するの念を増せり」と述べ、その執筆動機を語っている。キリスト教徒たる社会思想家としての村井の特徴的な社会主義観を述べた『社会主義』は、一〇章からなる社会主義論文集ともいふべきものであるが、「社会主義と美術」と題された二〇頁に亘る第六章において、村井は John Ruskin (1819—1900) のモリスへの影響関係にふれつつ、根幹において両者の思想は相通じるものとし、彼らの考え方の重要な点を要領よくまとめている。

すべての国の芸術はその国の徳性の指標となるといふラスキンの考察を受けついで

「私の研究」

モリスは、誤った文明の方向を矯正し、正しい社会を現実のものとしなければ、瀕死の芸術を救済することは出来ないと考えた。当時の粗悪で醜悪な日用品に対する憤りと「美」へのなみなみならぬ情熱が、美術工芸家としての彼を駆りたてたのである。そしてモリスは自らの価値観を現実のものとするには当時勃興しつつあった社会勢力、即ち現実に労働のにない手である労働者階級を「教育」するしかないと考えた。モリスは商業主義に打ち勝ち芸術を復興させるには、商業主義のうみ出す偽りの「luxury」即ち「waste」を排し、「simple life」を民衆の生活様式としなければならぬと説いた。つまり、資本主義的商業の奴隷であることから解放された時、はじめ「簡素でたしなみのある生活」が送れるというのである。またモリスは労働とは人間の創造的欲求を満たすべきものであると考え、更に、この労働を現実のものとするのが人間にとっての幸福の実現であると認識した。人間の日々の労働が芸術活動となること、これこそがモリスの思想の根幹

となるものである。マルクスから労働における疎外を学んだモリスは、疎外からの解放こそは人間の本質の回復であり、それが実現された時にこそ、人間の潜在的な可能性が十分に発揮されると考えた。即ち、モリスの社会制度改革への希望は、人間の全体像の根源的な変革への願ひでもあった。このモリスの全人格を集約する見解は極めて倫理的なものといえよう。生活環境の醜悪さに、芸術の墮落に怒りを感じたモリスが美術工芸家としての自覚に基き、まず審美的社会主義者として実践活動に参加したのは当然のことであったが、社会主義者としての自覚が深まれば深まる程、彼にとつては審美的社会主義者などという狭い領域にとどまっていることは不可能であった。美を守るといふ芸術家としての使命感は、次第に人間をその本来あるべき姿にたちもどらせるという倫理的色彩を濃くするのである。

村井は以上のようなモリスの思想を「商業主義」を軸として捉え、(一)自然破壊(二)芸術の墮落(三)労働疎外、以上三点に対するモリスの考え方をほぼ正當に評価し、紹介している。更に諸悪の根源である商業主義を理論的に支える競争の原理を唱える経済学者達に対するモリスの非難と、資本主義体制そのものに対する批判をとりあげている。また村井はラスキンとモリスがこれらの批判を通して最終的に到達した理想について、「ラスキン及びモリスは現時の社会に満足する能はず、遂に社会主義の唱ふる社会制度を以て其理想とするに至れり」と述べている。芸術はその時代と社会の反映であり、社会が利己的な商業主義を容認している間は決して真の芸術、真の美は実現しないというラスキンやモリスの考え方が彼らに社会主義を選ばせた原因であると村井は正しく考えた。約九〇年前、モリス没後わずか三年で村井が、この複雑で多岐に亘る才能を有する巨人をほぼ正確に捉え、その思想を紹介したことは注目に値する。そして村井のモリス紹介は堺利彦にモリスの存在を知らしめ、影響を与えることになのである。

(大学商学部専任講師)

十八世紀英文学を主に勉強していますと
言うと、まず大方の反応は「……」「……」
に意味不明のにやりが伴うか、「そうです
か……へえ」ときてあとはもごもごと口
ごもるかということになる。もちろん中
には英文学に少し詳しい人がいたりして、
「で、主にどんな作家を？」と訊いて下さ
ることもあるが、「まあ、ポーブあたりを
ボチボチ」と答えると、やはりハムレッ
トではないが「あとは沈黙」となるのが普
通である。だからと言って別に淋しくはな
いけれど、シェイクスピアやキーツあたり
にしていたら、もう少し話題も広がるかな
どと思うことはたまにある。しかし、今さ
ら変えるわけにも行かないから、何とかし
がみついているのが現状だ。

それにしてもなぜ十八世紀英文学を勉強
するようになったのか、考えてみるととも
もと確固たる信念や明確な動機があったわ
けではない。そんなことを言えば、なぜ仏
文学ではなく英文学を選んだのかもよくわ
からないが、ともかく学部卒の卒業論文のテ
ーマを決めるためにある先生のもとへ相談

しに行ったところ、十八世紀はあまり人気が
ない時代だが、色々調べてみたら案外面
白いテーマが見つかるかも知れない。それ
に時代の特徴が君の性格に向いている可能
性なきにしもあらずなどと言われ、これに

安易に納得したこ
とから現在が始ま
るのである。

ところでまず、

十八世紀英文学研究

小林章夫

十八世紀英文学が
なぜあまり人気が
ない(なかった?)
かについては、二
つの理由が考えら
れる。第一は、十
八世紀前半という
のが、どちらかと
いうと政治的に安

定した時代で、革命の嵐とはあまり縁がな
く、そのために激動の世界に色を添える灼
熱の恋や愛があまり見られなかった点であ
る。そのためか、十八世紀後半から十九世
紀にかけてのロマン主義時代と対照的に、

古典主義時代などというはなはだ非情な名
前をつけられて、文学青年や文学少女の心
をくすぐるに至らなかった。大体、時代思
潮を一つのレットテルで表現するなど無茶な
話だし、どんな時代でも恋愛はあるのわか
ら、もう少し深く突っ込んでみたら色々面白
そう、わくわくするような現象が見えて
きたかも知れないのだが、どうも先入観
というやつは一筋縄でいかないものであ
る。

しかしたしかに、いわゆる十八世紀英文
学という名でくくられる文学作品の多く
が、ロマン主義のキーツやシェリーの詩と
比較して、はなはだ散文的、非情熱的なのは
否定できない事実である。「君の唇はバラ
のように赤い」とか「君の瞳は真珠の輝き
を想わせる」、「耳のうしろがすきとおつて
さくら貝を陽にすかしてながめるような」
といった表現は、わがポーブ先生の詩には
あまり見られないものである。無論、皆無
というわけではないが、時折出てきたなと
思うとコンテクストがはなはだ非ロマン的
なのだ。たとえば傑作『髪の手盗み』とい

う詩にはベリンダという美女が登場する。

「象牙のごとくつややかな白きうなじ」をもち、「髪は優雅にたれて」「生気溢れる顔」をしたと形容されるベリンダは、キーツの

『つれない乙女』に描かれた女性にまさるとも劣らない魅力がある。ところが、この『髪を毛盗み』という作品の荒筋はと言えば、美女ベリンダが男とのつまらぬ静い（まご）もとで自慢の髪をバツサリ切られてしまった顛末を書いただけで、それをいかにも御大層に叙事詩に仕立てているのである。

しかし、『髪を毛盗み』などは描写が微細で、ロココ趣味に溢れている点、古典主義時代の作品としてはまだロマンを感じさせなくもない。ところが、ポーブの友人スウィフト、あの類稀な諷刺文学『ガリヴァー旅行記』の作者の詩となると、何ともえげつないがある。『貴婦人の化粧室』という題をもつ詩だが、登場するヒロインの名はシーリア。ちょっと目には美しき羊飼いの娘を主人公とした恋愛詩のように思えるのだが、内容は全く正反対、美や愛とはまるで関係がない。

シーリアが五時間かけて化粧を終え、美女となって部屋を出たあと、下男がこっそり部屋へ忍びこみ室内を調べまわる。彼が目にしたものは、腋の下が汚れた肌着やら、額のしわを伸ばす布やら、臭いを消すための粉やら、子犬の小便を蒸留してつくった化粧水やら、埃と汗でぬるぬるのハンカチやら、ともかく悪臭と不潔とがごちゃまぜになった品々だった。あげくの果ては、この化粧室にあった「チェンバーポット」、つまり西洋版おまるの中身が具体的に語られる。このあたり、とても本誌の読者には御披露できるような描写ではなく、それでも興味があるという酔興な方は、直接『スウィフト詩集』をひもとかれんことをお勧めするにとどめたい。

しかし、それにしてもこんな詩を書くのには、スウィフトの中に単なる遊び心、物のはずみ、酔興ですまない何らかの鬱屈した感情があったはずで、これを細かく調べて行くと、実は十八世紀という時代、平和と安定、繁栄を謳歌したかに見える時代の奥底に、秘かに暗いどろどろした流れがあ

ったことがぼんやりと見えてくる。その正体が一体何であったのか、今の僕にはまだはつきりしたことが言えないのだが、この駄文の趣旨に沿った話に戻せば、十八世紀英文学なるものの研究が従来あまり人気のなかった理由の第二は、詩にしても劇にしても、あるいは小説やエッセイにしても、作品だけを読んでいい気分にはたれるという効果がありなく、どうも作品の背後にある諸々の現実、政治、経済、社会の動きなどをある程度調べておかないと、もう一つよく理解できないため、つい面倒臭くなる点があったのではないかと。

だが、僕の性格に十八世紀が案外向いているとおっしゃった先生、今にして思うと大した眼力と感心するのだが、その僕が教室で女子大生相手に、まさか『貴婦人の化粧室』を講義するとは想像もつかなかっただろう。それに僕だって、汗臭い肌着よりバラの唇の方が好きに決まっている。

（女子大学助教授）

柔道は日本の伝統的文化である武道から世界中に広まってオリンピック種目になった唯一のスポーツである。しかし、先日ソウルオリンピックではついに柔道の無差別級が廃止され、その代わりに女子柔道が登場した。さらに、円形のマットの上で、赤と青の色にそれぞれ染め上げられた柔道着を着た選手が相対して柔道の試合が行われるようになる日が着々と近づきつつある。既に今年のヨーロッパ選手権では赤と青の柔道着での試合が実施された。このように、現在、柔道は大きく変わりつつある。柔道は嘉納治五郎によって一八八二年（明治十五年）に創始されたもので、正式には日本伝講道館柔道と呼ばれる。この時点で柔道は、嘉納という二十三才の青年が作り上げた新興の柔術の流派のひとつに過ぎなかった。その後、柔道と名付けられた講道館流柔術は年と共に飛躍的に発展し、一九四五年の敗戦による数年の禁止期間と日本武徳会の解散を経て、名実共に唯一の柔道の総本山となったのである。国際的な普及についても嘉納は一貫して力を尽した

が、一九五一年にはIJF（国際柔道連盟）が結成され、一九六四年の東京大会からオリンピック種目となり現在に至っている。このような発展の要因として、時代的・社会的背景や嘉納の経歴（二十数年間東京

柔道はどこへ行くのか

濱 口 義 信

合・再構成して柔道を作り上げた。その過程で彼が到達した柔道の定義は、「心身のエネルギーを目的に対して最も効率的に使用する方法」（精力善用）というものであった。そこにおいて本来の武術としての柔術

は、柔道の原理を内面化するための教育手段として位置づけられた。さらに嘉納はこの武術としての柔道の練習形態についても工夫を加え、「講義問答」、「形」と共に、試合形式の練習である「乱取」を重視した。これはスポーツの要素を柔道の練習の一部として取り入れたものである。また、それぞれの練習の成果を確認する励みとして、細分化した段位制度を設けるなどの工夫をした。それに加えて、嘉納は急激に増加する門弟に対応して、指導者の養成、修業者の組織化、機関紙の発行、などを行っていたが、それらも柔道の発展に重要な役割を果たしたと考えられる。

嘉納は、楽しさや創意工夫を含み自発的学習がなされるというスポーツの利点を認めて乱取を重視した。しかし熱中し過ぎる、運動が片よるなどの理由でスポーツと柔道の一線を画し、また危険な技は乱取では禁止し、それらを形で補うなどの教育システム上の工夫をした。従って、形や理論的研究である講義問答を共に行うことによってのみ、柔道の全体的学習が成立するのが嘉

「私の研究」

納が構想した柔道であった。また試合も単に勝敗を競うものではなく、学習の進歩を指導者が評価するものであり、そのためのハンドブックとして試合審判規定（競技ルールではなく）が制定された。

しかし、このような嘉納の構想にもかかわらず、柔道が世界にも普及発展していく中で中心的な分野となったのはスポーツとしての柔道であった。ここでの中心的関心は勝敗をいかに決定するかである。安全と共に、両者が平等になるように、しかもどんなゲームが展開されるにしても客観的に（誰も、が分かるように）必ず勝敗を決定することが要求される。そして、勝敗の決定基準となる競技ルールは何にも増して重要なものである。このように勝敗の意味付けが全く異なっている状況の中で、体重による階級制度の導入とその細分化、試合の時間と空間の制限、勝敗を決定する基準の細分化、審判員の数の増加とその多数決による勝敗の決定、さらに最初に示したような状況が生まれつつあるのである。

柔道はその意思決定に関する組織・制度

においても大きな矛盾を抱えている。IJF規約にも明記されている通り、柔道は嘉納が創始した講道館柔道であり、柔道をする者はすべて講道館の門弟である。この限りで最高の意思決定機関は講道館である。一方、柔道の全世界規模の意思決定機関としてIJFがあり、日本も百数十か国の内の一つとしてそれに加盟している。ここの講道館の位置付けは世界中に無数にある町道場もしくは柔道研究所のひとつに過ぎない。このように柔道においては最高の意思決定機関が二つあるのである。これは柔道の世界的な普及を目標にして今日まで努力してきた講道館関係者にとって大きなジレンマである。

以上が最近私が進めている「柔道の国際化に伴う文化的変容についての研究」の一端である。しかし、ここまでの予備的作業段階でも私がこれまで行ってきた「スポーツの定義」についての一連の研究や、体育とスポーツの関係、さらに日本的スポーツ論または日本人にとってスポーツは何かというような諸主題と関わる多くのポイント

を有している。

現在、スポーツは非常に多様化している。その中で、オリンピックを頂点として一番の問題となっているのは競技の際限の低い高度化とそれに伴う勝敗へのこだわりすぎ、そしてそのために生じる人間的豊さの欠如である。嘉納は既にその時代に、先に述べた「精力善用」と共に「自他共栄」という柔道の理念を示していた。これは、両者が勝とうとして相違・工夫し合うところに、互いの向上を促し合う関係（相乗性）が成立するというスポーツにおける競争の豊かな可能性を現す理念である。また、ついに文部省指導要領に「武道」という名称が復活することになったが、嘉納が作った柔道は「文武両道」を基礎とした「合理的道」であり、決して「武士道」を育てる武道ではなかったことも銘記されるべきであろう。

（女子大学助教授）